林政ジャーナル

No.27
2001年3月22日
日本林政ジャーナリストの会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-1-17-507
NPOルーバンネット内
TEL・FAX 03−3587−1210

第23回定期総会の報告

当会は、3月21日午後6時から、東京・霞ヶ関の商工会館で第23回定期総会を開催し、第1号議案「2000年度活動報告」第2号議案「2000年度決算」第3号議案「2001年度活動計画」第4号議案「2001年度予算」第5号議案「会則変更」第6号議案「役員改選」を審議し、いずれも原案通り承認された。

また、議案審議終了後、松井光瑤大日本山林会名誉会長から「21世紀の森林経営」の演題で特別講演が行われ、引き続き懇親会を行った。

会則の変更

第7条会員の資格に(3)項を追加し「1年以上会費を滞納した場合」会員の資格を失うとした。

第8条から「常任幹事会」を削除した。

役員改選

次のとおり、役員が決定した。(敬称略)

顧　　問　杉本　一　森　巌夫　増田俊二　大谷　健　二村寛寿　中西　實
会　　長　高田浩一（再）
副 会 長　上松寛茂（再）　吉藤　敬（新）
事務局長　石井健雄（新）
幹　　事　赤堀楠雄　荒谷明日兒　石山幸男　小野田法彦　加倉井弘　北島英彦
　　黒川宣之　斎藤恵巳　高地英寿　辻　　潔　滑志田隆　成田利典
　　長谷川健敏　林和彦　深野久　古野雅美　福井昭一郎　安岡一雄
会計幹事　児玉洋子以上（再）
監　　事　森田稲子（再）　吉川比出夫（新）

『21世紀の森林経営』

松井光瑶・大日本山林会名誉会長

私は若いころ、国有林の土壌調査で山を歩き回った。民有林についても昭和29年から適地適木調査もやってきた。だから、関心はどちらかというと、林業なり農業なりが成り立つ環境条件といったものである。もう一つは、そのうち農林省が熱帯農業研究センターをつくった。ちょうど、そのころ、木材輸入などの問題があって、林野庁も「熱帯林業研究所をつくろうではないか」という動きがあった。どうも、外国との関連の深い仕事となると、必ずしも農林省の所管事項ではない。それでそういうものを造るのに大変な苦労を農林省の関係者がした。せっかく、農業の方で何とか格好がつきそうになっているのに、また、林業は林業でやるというのでは“アブハチとらず”になるから、とりあえず、農業と林業と一緒になってやったらどうか、ということになり、熱帯農業研究センターに林業も加わることになった。そのための準備で東南アジアあたりを走り回って、共同研究をする良い場所があるのか、いいテーマがあるのかを見てきてくれと頼まれた。それが熱帯研とのお付き合いの始まり。まもなく、JICAが発足。土壌調査が一段落した段階から、今度は熱帯関係の仕事になった。それだけなのだが、たまたま山林会の責任者のつなぎで、お邪魔することになった。

私自身、山を持っているわけでなく、研究所で理屈をこねただけで、なかなか山持ちさんの気持ちは分かりかね、あまり適役ではなかった。しかし、何がしかの恩返しはしなくてはならないと思っている。

▽深刻化する水不足と森林

だから、私の経歴から言って、問題はやはり、森林をめぐる環境をどう考えるか、が狙いになる。『21世紀の森林経営』といった大きな話はとてもできないが、日本にとっては今、木材不況。それを21世紀にどう考えるのか。世界の情勢がどうなるのか、をバックに考えて、その上で見直した方がいいのかなという感じがする。ご承知の通り世界の森林は非常な勢いで減ってきている。多少減り方が鈍ったような状態だが、それでも、相当な量が減っている。その結果、いろんな不都合なことが起きている。中でも、私が関心のあるのは、やはり、「水問題」である。現在、いろんな地域で水不足が起きている。端的に出ているのが、中国の黄河の“断流”現象だ。1997年に黄河の水が海まで至らなかった日数が７カ月以上もあった。世界文明の発祥地の一つである黄河、その水が海まで届かない日が半年以上に及んだ。「断流」が始まったのは1972年から。それがずっと続いているわけで、大変なことである。

話題的にいくつかの例をあげる。中国とインド、アメリカで、世界の食糧の半分を生産している。この３国で、食糧の増産が進められたのは新品種の開発と潅漑である。最初は河の水を使ったのだろうが、いま、相当な勢いで地下水を汲み上げている。アメリカの例では、テレビなどでよく見るが、大変大きな、長さ１キロにも及ぶパイプをぐるぐる回して水をまいている。非常な増産をもたらしている。が、アメリカの中部の、こうし

た潅漑農業の中心地では最近、1年間に1メートルぐらい地下水が下がっている。この地下水は、新しく入ってくる水ではない。過去において、たまたま溜まった水を汲み上げて使っている。地下水が深くなりすぎて潅漑の放棄がかなり進んでいる。アメリカは「世界の食糧は、うちで面倒をみてやる」と豪語しているそうで、一つの戦略物資として食糧を取り上げているわけだが、そのアメリカで、こんな現象が発生しつつあるのだ。その前に、すでに潅漑をやったことによって、土の中にある塩分が地表に上がってきて、土壌が塩に侵されて農業ができなくなったところもある。相当な勢いで土壌が悪化し、水が足りない。これはインドでも、中国でも…。中国も地下水をずいぶん使っているが、地下水の低下が激しい。地下水をどんどん汲み上げると、補給するのに非常に時間がかかる。自然に地下水に入ってくる量の倍ぐらいを吸い上げていると言われる。インドも例の「緑の革命」以来、相当増産が進んだが、これにも大変水を使った。そうすると、食糧生産が必ずしも安定しない。世界の食糧の2分の1を生産しているというこれら食糧基地が、危ない状態になってきている。

水が非常に少なくなった。その原因の一つが、やはり森林問題につながってくる。水源地での水の供給。森林が水をつくるわけではないが、森林があることによって、水の循環ができる。水がゆっくり“まわる”。ロスが少なくなる。海へ行ってしまう水の量が減って、その途中で、水を使いやすい状態にしてくれる。その点で、森林の効果は非常に大きい。

一方、地球上の水は豊富だと思っていたのだが、実際はその97%が海の水。これはすぐには使えない。われわれがすぐに使える水は、地球が持っている水の現存量の1%程度である。われわれが使う水というのは、蒸発して雨になって降りてくる水。直接、海の水は使えない。北極、南極の氷もすぐには使えない。石油が豊富な国では、かなりお金をかけて海水の淡水化をしているが、これは量に限度がある。利用できる水の量は決まっていて、それをいかに有効に循環利用するか、にかかっている。それには森林に相当、頼らざるをえないのではないか。「20世紀は石油の時代だったけれども、21世紀は水の時代になるのではないか」と言われ始めている。

面白い話がある。北アフリカのモロッコから中東のイランに至る地域では、いよいよ水がどうにもならなくなって、農業生産がどんどん落ちている。また、足りない水を都市化が進むために、都市でも使う。工業の方でも水を使う。ますます、農業へ回す水はなくなってくる。だから、いま、外国から食糧を買っている。「1トンの穀物を作るのに、1,000トンの水がいる」という。食糧輸入の形で、大量の水を輸入していることになる。そうすると、食糧はますます全体の供給量が窮屈になってくる。水は、21世紀のわれわれの生活に相当大きな脅威を与えるものになるだろう。日本でも、必ずしも今は水が十分とは言えない。時々、夏に断水がある。今までは農業に水を使っていればよかったのだが、都市化が進んで、とくにトイレが水洗になり、すごく水を消費する。都会で相当な水を使い出した。それから、産業面でも冷却用水がずいぶんたくさん使われる。これらがうまく循環されないで、みんな海へ行ってしまうとなると、雨の多い日本でも、水不足をこれから考えなければならないだろう。とくに、日本の場合は雨は多いのだが、山が急峻だから、降った水が海まで非常に短時間に行ってしまう。降ってきた水を有効に使うことができない。自然に捨てる方が多い。だから、『森林の効果』にますます

期待がかかる。これは世界の趨勢（すうせい）でもある。

▽「土壌」・「炭酸ガス」も…「環境財」としての森林

もう一つは土壌。いま森林が非常な勢いで減っているのは途上国だが、途上国では人口がどんどん増えて、それに食糧を供給するだけの土地がない。あるいは国民が土地に到達できない事情がある。途上国の場合、森林はほとんど国有化されている。国家財政を立て直すため、ある日、突然国有化されたケースが多い。天然資源である木材を伐ってカネに代え、足りない石油・食糧を買う。森林地帯に住んでいる人たちは知らない。昔からここには森林があったんだ。どうせ、オレたちは生えているのをいつでも取ってくればいいと思っていたのが、ある日突然、国有化されてしまって、疎外されて行く。そうなると、何とかして食うためには不法に山へ入り、そこを切り開いて食糧を作るより仕方がない。世界の森林減少の相当部分は、食糧増産のための土地として利用されてきた。その原因は何か。貧困である。これは簡単に解消はできない。森林が減るのはけしからんとは、皆わかっている。しかし、それを止める手だてがない。だから、今でも森林は依然として減り続けている。そうなると、森林の下でつくられた土壌に単年作物をつくれば、土壌劣化が非常に速く進む。とくに、東南アジアは大変なんだが、森林がまだあったとしても、それを切り開いて農業適地になりうるような土地は、ほとんど底をついているのが現状だ。

森林を切り開いて農業をやって行っても、地力がすぐに落ちるので、また新たに森林を切り開いていかねばならないという悪循環に陥っている。ということは、森林が犠牲になって農地を拡大したとしても、生産力はそれほど期待できない。それを元に戻して何とかしようとなると、やはり、もう少し森林を大事にしなければならない。ヨーロッパでも、土壌劣化のために放棄されている農地面積は年間500万ヘクタールから1,000万ヘクタールになるだろう、と推定されている。アメリカでも農地放棄が続いている。劣化の主因は、土壌の塩類集積と、風、水による土壌浸食である。

もう一つ、心配なのは炭酸ガス問題。皆さんが先刻、ご承知の通り。地球温暖化に影響する炭酸ガスは、工業の発展に伴って増加し続けており、これを減少させるための工業的手法が見い出せないため、植物の炭酸ガスを吸って酸素を吐き出すという炭酸同化作用（光合成）で、とくに、効果の大きい森林への期待が高まっている。ところが、その森林が食物をつくるための焼畑などにされ、減っている。こんなことを考えると、やはり、世界では森林は『環境財』として考えなければならない。水問題を考え、農業増産のための土地問題を考えても、それから炭酸ガス・地球温暖化の問題を考えても、森林の価値は環境資源として考えなければならない。いま、日本には外国から安い木材がどんどん入ってきている。21世紀を展望すると、こんな状態が長く続くとは考えられない。環境財としての森林の価値は、相当高く評価されなければならない。そうなると、安いからといって、お金を持っている人がどんどん輸入して使っていいのか、となってくる。

とくに、水の問題では、すでに国際的な水争いが始まっている。たとえば、ナイル河とか、ユーフラテス河、チグリス河などの乾燥地帯を流れている河が、いくつかの国を通って流れている。上流域が水を抑えてしまうから、昔から協定があって、上流域の国がそのうちの何割は下へ流してやる約束になっている。しかし、いざという時に

は、背に腹は代えられないので、必ず水争いになる。当然、森林だけが手ではない、水の使い方をもっと工夫する余地があるけれども、大きな流れとして水資源は増やすことは不可能だから、少しでも貯留量を増やす努力をするには、『森林』を無視するわけにはいかない。どんどん伐って、よその国に売ってやるという状態にはならないだろう。ともかく、世の中は今すごい勢いで動いているから、ちょっと、考え方が一つの方向へ片寄れば、ぐっと、そちらに動く可能性がある。水問題に対しては、われわれは暢気（のんき）。しかし、みんなが気づき始めれば、わっと動いていく可能性がある。そうなれば、ただ、日本が材木を買ってくれるから売るということにはならない。少なくとも、環境財である森林は、それぞれの地域で、それぞれの国の責任で、一定量は確保して行こうじゃないか、という流れに当然なるだろう。

土地資源の問題も同じ。劣化の方向へ明らかに進んでいる。少しでも劣化を遅らせる、あるいは富化の方向へ。富化の方向へ持って行くには、やはり、永年作物を多く取り入れる以外にない。もう一つ、大森林にしないまでも、中国の例だと、北西部あたりは乾燥地帯が多い。そこに、点々と木を植えただけでも農産物の増産になる。もともと生産量が少ないから、パーセンテージでいうと、２割増産とか、３割増えたとか数字が発表されている。ちょっと風を抑えるだけで、蒸発、蒸散を抑えて、乏しいながら土の中にある水を農作物の生産に使える。そういう例が最近、たくさん報告されている。だから、大森林を造らないまでも、乾燥地帯の周辺に、ある程度の防風林。というのは、裸の土地は日中、非常に温度が上がる。しかも、雨の少ない所は空気が乾燥している。暖かい空気が吹くのは大変な蒸発促進効果があるから、それを少し抑えるだけでも、土の水を農作物に有効に使えるわけだ。

最近、アメリカは都市緑化というのか、都市林業というのか、「アーバン・フォレストリー」といっているが、ここの中にも大変面白いデータがある。たとえば、都市化されたところの各家に一本ずつ大きな木を植えてやれば、それだけで暖房費、冷房費が10％のオーダーで節約することができるという。とくに、夏の冷房はエネルギーがかかる。木を植えると、日陰になるのはもちろんのこと、葉っぱから蒸散する。その時の蒸発潜熱が気温を抑える効果がある。そういうものを計算して行くと、相当の都市環境の改善効果がある。アメリカでは最近、この「アーバン・フォレストリー」が雑誌によく出てきている。

私が山林会にいたころは、日本の木材貿易が心配で、日本へ一番入ってくる木材はアメリカ大陸の西海岸からだった。あの辺がいつまで続くのか、しかも天然林の材で効率が良く安いから、あれが豊富な間は日本は相当苦しいな、と思っていた。それが例のマダラフクロウ問題で、相当、禁伐量が増えた。それで今、アメリカの木材生産の中心はむしろ中南部に移っている。やれやれ、これで日本も何とかなるかなと思った途端に、今度はヨーロッパから盛んに材木が入ってくる。非常に安い値段で来る。これはなかなか、よその資源が減るのを待っていたのでは、日本も容易ではない。10年や、20年では間に合わないかなという気がする。しかし、その資源の制約が、環境問題ということになってくると、地球環境という立場で考えれば、相当真剣な問題になってくるだろう。とくに、熱帯材の輸入をストップしようじゃないかとの話がひところ盛んになった。これを考え出したのはイギリスとオランダ。彼らは本気でそう思っている。このまま熱帯で森林がどんどん減って行って、炭酸ガスの量が増えていけば、海の水

面が上がって、オランダなどはすぐ領土が狭くなる。高い山はなく、平らなところが多く、しかもゼロ・メートル地域が多い。そこで堤防を築いて農地を広げている国だから、非常に敏感。熱帯材のボイコット運動を始めた。「熱帯の林を伐るのは罪悪」と彼らはみている。輸出しようとする国にとっては「大きなお世話。こちらは材木を売らねば国が成り立たない」ということになる。

しかし、これもちょっと、あやしくなった。フイリピンから、日本はラワン材をどんどん入れていた。同国にめぼしいラワンの林は無くなってきている。減っていくスピードは非常に速い。やはり、イギリスやオランダの言っていることの方が説得力が高くなるだろう。もう少し、みんなが炭酸ガス問題なり、水問題なり、食糧問題に対して関心を高めれば、木材貿易に影響が出てくると私は考える。

▽環境財として日本の森林の温存を

いま、われわれの林業は輸入材に押しまくられて大変窮地に置かれているが、やはり地球全体からみれば、環境財としての森林は貴重なものである。減らすどころか、少しでも、増やす努力をして行かねばならない。当然、国際的な世論になるだろう。そうすると、資源が少々あるから、あるいは余っているからということで、簡単に木材貿易に乗せるというわけにいかない時代が早晩、来るのではないか。林業は非常に時間のかかる産業で、その時になって、急に「それ！」といっても間に合わない。少なくとも林業国として栄えてきた我が国は、日本の林業を温存せざるをえない。

どうすれば、温存できるか。いろんな面で、どこの企業もリストラだ、何だと大変な苦労しているわけで、林業だけではない。みんなが苦しい中で工夫をして、将来を展望し頑張っていかねばならない状態だ。とくに、日本の場合は降水量が多い、多すぎることもあるから、水のコントロールが大切。それから工業化が進んでいるから、炭酸ガス問題は相当の責任を持たねばならない。そういうことになると、やはり、森林の温存は国家的使命になってくる。

では、その森林を誰が守り、誰が造っていくのか。森林はいろんな恩恵を与えてくれる資源であり、有効に使っていかねばならない。そうであれば、林業をやってくれる人たちが相当数いてくれなくては困る。一度、日本の林業がなくなってしまえば、また、急に林業を担う人たちを育てることは大変に困難になる。この辺が工業の世界とは違う。非常に時間のかかるものを相手にし、しかも、一度こわしてしまうと、再生するには大変な努力と時間がかかる。カネもかかる。だから、日本の林業はどうしても守っていかねばならない。

今は林業そのものが苦しいわけだが、幸か不幸か、少なくとも、これから更地に木を植えて林業を始めるという状態ではない。その域は超えている。1,000万ヘクタールの人工林を造った。だから、林業はもともと、森林ありき。森林をいかに有効に使うか、一つの方法として木材利用があった。更地にタネをまいたり苗木を植えたりして、さあ林業をやりましょうというものではない。森林はもともと地球上にたくさんあった。それをうまく使おういうことから林業が始まった。

そう考えると、日本は新しい林業のスタートラインに今、立った。やっと、苦労して…ほんとうは戦後えらい苦労して育てた林で儲（もう）けるはずだったが…儲からなくなった。しかし、少なくとも、森林は整備された。これをいかに有効に使っていくかが問題。初期投資はそれほど考えなくてもいい、あるいは、少なくていい。いま出来

上がっている森林をいかに守り、いかに使うかを考える。そういう段階にきている。これを何としても死守していく努力が必要である。そうすれば、近い将来、日の目を見る時が来ると信じる。

▽森林放棄の対策に集団化も

最近は森林を放棄される方が出てきた、と聞く。これは何らかの工夫で、しのいで行く努力が必要。数ではひと握りだが、大森林所有者たちは森林という財産を持った。森林は一つの銀行であった。置いておけば、ひとりでに成長していってくれて、リスクを伴う金融市場にカネを出すよりも、森林にストックしておいた方が安全だという発想がもともとあったと思う。それに努力された方は相当の森林を確保して、営々とそれを運営してきた。こういう人たちは何とか、かんとか言ったって、山の取り扱い方も分かっているし、それなりの蓄積もある。こんな人たちは、いままで通り技術を保存し皆をリードしてほしい。

問題は戦後、不足物資である木材を何とか増産しようと国の資源造成計画に基づいて林業を始めた人たち。こういう人たちがいま、非常に困っている。ひところは、べらぼうな値段で材木が売れた。あと20年か、30年、待っていれば、いずれは相当な収入があると期待した。そのために国も一生懸命、普及員制度も作ってくれて、あるいは造林の応援もしてくれた。もうちょっと我慢していれば、相当な収入になると望みをかけていた。しかし、これらの人たちには自ら技術をつくり、研究し、林業の神髄をきわめて、経営していこうという余裕はなかった。いろいろ国が援助、指導してくれるから、その線に乗っていれば、いずれはうまい夢がみられるだろうと、大部分は思っていた。だから、こういう時代になってみると、林業として成り立たない経営をやってきた人たちが多い。そんな人たち一人一人が「いまの難関を乗り越えて、何とかしなさい」と言われても、力はない。そうすると、どうしても、手助けをしてくれる人、しかも現場で後押ししてくれる人に応援してもらわないと、どうにもならない。

そこで、一番期待したいのは森林組合である。造林は曲がりなりにもできたとして、問題は伐出経費。材価、立木価格よりも、少しでも安くできれば、何がしかの支えにはなる。森林そのものは結構良い面もあり、それなりに生き甲斐（かい）になるから、赤字にさえならなければ、せっかく造った林だから持っておこうと思っている人が相当多い。それが、今は小面積で一人一人でやっていれば、完全に赤字である。専門家の計算でも…。何とかプラスにする方法を考えなければならない。それは、一つは集団的な持っていき方。伐出費を経済的にするには、ある程度、材としてまとめる必要がある。それを面倒みてくれるのは、やはり森林組合である。せめて10軒ぐらいが一カ所でまとまって、伐出計画、あるいは販売計画を立てれば、それなりの売り方も考えられる。伐出経費も相当節約できる。それを一人一人があちこち飛び回って話しても、なかなか難しい。森林組合のようなところが面倒をみて、少しでも安く伐出し、少しでも有利の売ることができる形をつくることが必要である。

▽“ぬるま湯”からの脱皮を

林業には非常な沈滞ムードがある。何とか少なくとも赤字にはならないという形にすることが必要条件である。最近、森林組合へ外部から入ってくる人がぽつぽつ出てきた。Ｕターン組か、Ｉターン組かは知らないが…。そういう人たちが森林組合に夢を持って入ってきた。中に入ってみたら「ともかく、森林組合は暢気だ。企業がせち辛

く、イヤだからきたのだが、森林組合は本気で商売をやる気があるのだろうか」と言った声が出ている。外部で苦労した人が森林組合に入ってみると「あれじゃ、儲（もう）からないや」。私が林野庁に採用にされたころ、先輩連が自嘲的に「お前も、とうとう、林業温泉に来たかよ」と言った。林業温泉とは、“ぬるま湯”で、一度入ったら出られない、大変気分のいいところ、という意味。私はそういう面があったような気がする。これだけ、せち辛い世の中になって、しかも、使命感を感じるような林業で、もうちょっと、厳しさが必要ではないかと思う。「食えない」「食えない」といい、単なる計算だけでは、林業は成り立たない。もう少し、成り立つ工夫があっていいのではないか。森林組合の相当強い組織力を持って、『日本を救うのだ、地球を救うのだ』という気持ちを持った組合が増えてくれれば、少なくとも赤字にならない林業は相当の範囲でできる。

つい、この間まで、1ドル＝360円だった。それが100円ぎりぎりになった。日本の貨幣価値が3倍になった。だから、そのカネで換算すれば、外国の材木が安いのは当たり前。私どもが国際的な関係ができて、ドイツへ行ったころ、1マルク＝140円ぐらいした。最近は1マルク＝70円～80円。それほど、貨幣価値が違うから、少々の努力で、外国から入って来るのは安すぎる、と文句は言えない。日本のカネの価値が上がったのだから、それに対応した努力が必要。そんな現実を無視して「儲からない」「儲からない」というのは具合が悪い。

『環境財』としての森林がある。環境財ということであれば、それぞれの国が自分の森林は大事になってくる。だから、そう簡単に輸入できない状態の時代が、必ず来るだろう。これは私の推測だ。しかし、一度そんな考え方が広がり始めると、非常な勢いで広がる。波及効果は大きい。国内でも、環境財として森林の価値について、みんなで国民へＰＲして、環境財に対する投資を国民みんなが担わなければならない、お金を投資しようという空気が出て来ると、林業そのものもだいぶ、やりやすくなる。

▽地域材、赤字とは限らない

もう一つは、「地方の時代」が盛んに叫ばれているが、森林がいろんな条件のところにあるわけで、研究所で研究した一般論だけで律せられない。地域地域で森林の利用は、いろんな方法が考えられる。一つの大きな流れとしては、輸入材に対抗できる生産方式。安物を大量生産する方法だが、輸入材に真っ向から戦う方法でもちろん大切。しかし、木材にはまだまだ他にいろんな価値がある。同じ家を造る場合でも、東京に造る場合と地方都市で造る場合は当然違う。木材の使い方によっては、輸入材と同じような価格にしなくても、使ってもらえるところが工夫の仕方によってはあるのではないか。

だから、もう少し、地方庁がそれぞれの現場の林業家の面倒をみられるような態勢をつくった方がいい。地域地域で、まだ稼げるところがあるのではないか。世界に流通している木材、しかも大都会で大量に木造建築をするところに使う木材と、地域地域の特徴に合わせた家に使う木材とは、当然、価格が違ってもいい。そんな売り方というか、使ってもらい方を工夫することによって、必ずしも全ての木材生産地が赤字になるとは限らない。

「地方の時代」といわれながら、地方にまだ、面倒をみるだけの能力が整っていない。だから、対応策としては、森林組合をいかにして強化して行くか。管理する面、販売する面での努力が重要

になってくる。正直いって大山持ちは森林組合に入っているが、組合のために、「ひと肌ぬごう」と思っている人は非常に少ない。だから、地域地域の林業を何とかものにしようという芯（しん）になるところは、やっぱり森林組合である。外部の企業から入ってきた人たちの言う通り、もう少し使命感に燃えた活動をしてくれれば、林業は相当、変わってくるのではないか。そういう運動を起こしたい。

「地元の木で家をつくろう」というキャンペーンもよい。セーフガードの話が最近出て来るけれども、セーフガードは自分でつくればいい。みんなで「日本の木で、われわれの家を造ろう」という運動ができるのではないか。輸入材が安いと言っても、大企業が儲けようと思って輸入して販売するのとは違って、家一軒の輸入材と国産材の差額はそんなに大きなものではない。気持ちの問題だ。「地球環境を考え、わが国の森林を守る」という考え方がある程度、ＰＲできるなら、そういう気持ちになってくれる人は結構いるのではないか。みんながそういう動きをしていけば、相当な効果は期待できる。少々の価格差なら、「われわれの森林を守るために、国産材を使って家を造ろう」という運動はやってしかるべきだろう。そのためには、やはり、国民全体に話しかける努力を林業界でしてゆく必要がある。

みなさんは機関誌や新聞などで世論喚起しているが、どうしても内部向けの情報が多くて、外部に対する働きかけが足りないと思う。外部の人たちが関心を持ってくれる広報活動が重要になってくる。

世論喚起がないと、なかなか、林業だけで何とかやろうと言っても、やりにくい状態だ。周りの人の関心が高まれば、気持ちは大きく変わる。

▽コスト削減に工夫こらせ

もう少し、コスト削減を考えてもいいのではないか。一つには、造林が一番カネがかかるが、造林はこれから大面積やっていくわけではないので、更新のやり方を少し考えれば林の継続はできるのではないか。最近、非皆伐林業というのが盛んに言われているが、これは仕方がない。皆伐しても造林費は今、出て来ない。そうなれば、売れる木から売っていって、更新はその間に考える。利益は少なくても、あとの造林費のことを考えれば、更新に当たってはできるだけ更新面積は少なくして行く。いろいろ工夫の仕方があるのではないだろうか。

それから、森林の管理をやるにしても、もう少し、「環境財でありますよ」という森林である以上、あんまり森林を壊さないで、その中から有効に木材を利用するというやり方を進めて行かねばならない。そうすることによって、軽減できるコストはある。たとえば、下刈りみたいなもの。下刈りは非常にカネのかかる作業（育林費の約４割とされる）だが、これは相当、削減可能な作業ではなかろうか。更新費そのものも林の状態になっているところで、木を植えるのは作業も楽。皆伐して草に負けないように下刈りしようと思うから、密植が必要になってくる。ある程度の成長をさしておく。そんなに急激に成長させる必要はない。実際、いまでも、材木が安い、安いというが、高く売れる木は年輪のそろった木である。肥料をやって、初期の段階で太らした木なんてのは二束三文だ。買ってくれない。だから、木というのは林がある前提で、労力が少なくて木が植えられて、その木がむしろ最初の段階は成長が悪い方が将来大きくなった場合、価値は高いものができる。最初の成長にこだわる必要はない。素直に

育ってくれさえすればいい。ということになれば、下刈りのやり方も、コストを落とす方法がいろいろ考えられるだろう。

四国の山本速水さんですか、下刈りをやらない造林を提唱している。背の高い雑草が入って来るところは刈ってやらねば植えた木がやられるが、潅木類がはえるようなところは1年や2年、下刈りしなくたって困らないところが現にある。こんな山は考えてやっていく手がある。

下刈りは必ずしも、何回やらなければならないと言うものではない。コスト削減をしたい、しかも植えた木は将来、いい林になってほしいと言う前提の中で、考えられる方法はその土地によって、いろいろあると思う。いままで私は「適地適木」調査をやってきた。「スギの1等地はこういうところです」と、やりました。

たしかに昔のように十分に手をかけてやれば、土地条件のいいところの方が成長がいい。しかし、成長が良く、ぶくぶく太った木が必ずしもいいとは限らない。むしろ、最初はあまり成長が良くないけれども、一応、健康に育ってくれるところもいい。土壌調査で出した1等地より、2等地、3等地の方がいい場合もありうる。そういうところなら、下刈り経費も、節約できる。すべてではないが、探せば相当ある。コスト削減の方法はいろいろある。

それから、1,000万ヘクタールの造林地があるけど、これを全部、儲かるように経営しなければならないわけではない。いずれ作業道なり、林道なりを広げていくわけだから、出すのにカネのかからないところから、徐々にやっていく。そうなれば、1ヘクタールとか、2ヘクタールの小面積の所有者の場合は、何軒かが組になっての「共同生産方式」が考えられる。共同でやったって儲かるのはお前の家だけではないか、私はあと何年かかるか分からない、といったことではなしに、お互いに一部分ずつ分け合う。共同でまとまって林を管理する方法がありうる。

こんなキメの細かいことは地元に直結した人でなければ、なかなかできない。だから、森林組合あたりが面倒をみてもらうのが一番やりやすいと思う。地域によっては、もう少し広く、隣り近所で話し合って、みんなで持ちこたえるのもいい。とにかく、そんな意欲さえ出てくれば、工夫の余地はある。

21世紀にこうしたら良いと言う名案はないが、天下の形勢はこのようになっているから、あきらめないで、もう少しの努力が必要と思う。コストを削減して森林そのものが生産力を維持して行くような経営をやろうと思えば、やっぱり、樹木の集団である林に対する知識、いま言う生態学的な知識を駆使していかないと、なかなか難しい。

そんな努力が必要だろう。そのためには、本当はつい、この間まで、国有林が日本林業技術の発信地だった。しかし、このごろは「国有林に、そんな余裕はありません」との話が強くて残念に思う。

林業試験場（森林総合研究所）が独立行政法人に模様がえすることになっている。試験場も、もう少し“現場主義”になってもらいたい。その地域の林業をどう再生していくか、研究・技術の面から協力してほしい。

（2001年2月21日　　文責・高田　浩一）